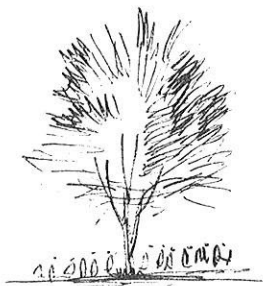


# 光の子



No.62 1995. 11. 1.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい (ペテロの第1の手紙第4章10節)



「どうしたの？」

え・中島英子

いのち

どんなに貧しくても

どんなに不幸でも

誰にでもあるもの

いのち

草や花も

犬や小鳥も

私たちと同じようにもっている

いのち

友が自分の命を絶った

なぜ？ どうしてなの！？

ああ・

自分だけのものではない

いのち

与えられたもの

いのち

かけがえのないものとしての

いのちをこそ！

中一 信楽 溪子

## 実りの季節

使徒言行録第14章17節

しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。  
恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、  
あなた方の心を喜びで満たして下さっているのです。

理事長 福島 勲

今や田圃は黄金の波に揺れて、早くも刈り入れの作業がはじまり、豊作の兆し濃厚である。

百姓仕事は楽ではない。天候や害虫、あくことなくはびこる雑草との戦いである。少しでも労を厭えば、効果がきめん、不作はまのがれない。労苦が多ければ、それだけにまた収穫の喜びも大である。

人は蒔き、神が雨風、陽を照らし実りの季節を与え、私たちの心を喜びをもって満たしてくださる。

まさに感謝の実りの秋である。  
一六二〇年、英国のピューリタン（清教徒）が信仰の自由を求めて、米大陸に移住した。

先住民らとの摩擦、農耕の労苦などの物語を、かつて、何だったかで読んで感激したものである。

彼らは収穫の喜びを感謝して、十一月第四木曜日を、収穫感謝の日として守った。米国ではこれを踏襲して今日に至っている。

我々の教会もこれを教会暦の中に組み入れている。

ユダヤでは、古くから麦の収穫感謝のペンテコステ、ぶどうの収穫の祭りがあった。期日は異なるが、各国が収穫感謝日を守っている。

魂の世界の収穫を思う。

初代教会のきびしい伝道の戦いは

言うに及ばず、わが国の宣教の歴史もまた峻烈極まるものがあつた。

福音宣教の畑としては石地にも等しかった日本に、よくも実りが与えられたものである。

秀吉や家康がキリシタン禁制をかけた、三百年に亘って鎖国を続けた。明治六年、キリシタン禁制の高札が撤去されたときも、欧米のご機嫌を伺いつつ、高札の趣旨は徹底したことだから取り除くといった調子であつた。

和辻哲郎の「鎖国」は膨大な書物だが、詳細なキリシタン禁制の研究である。

これを読んで印象に残るのは、プロテスタントのイギリス、オランダの宣教師と、カトリックのポルトガル、スペインの宣教師らが、宣教の功名争いから、お互いにそしり、ざんそして「彼らの布教は侵略の手段である」と言い、為政者らを驚かせ、キリスト教に対して堅く心を閉ざさしめたことである。

カトリック側のキリスト教史（上智大学中世思想研究所編）によると徳川政権の反キリシタン政策を具体化した要素を三つあげている。

一つは家康周辺の仏僧たちの裏工作（承悦、元信、崇伝などの僧）。

二つには、ポルトガル人の競争相

手として、一六〇〇年以来日本に渡来したオランダ人と英国人の影響。

三、独裁政治の全体主義体制（絶対神はいり容れない）。

秀吉も家康も外国貿易は望んでいて、東アジアの諸国との交易は行っていた。鎖国とはいっても、貿易統制とは別問題で、基督教の流入を防ぐためのものであつた。

これらのことから、最近の学者らの中には、鎖国という語はそぐわないとして、海禁という語を用いている人もいる（山本博文、鎖国と海禁の時代）

あの戦時中は、英米とキリスト教が同一視されて、キリスト教は迫害され排斥された。ようやく戦後、信教の自由が確保された。

伝道ということは、まことに不思議なことである。ひとりの人の弁舌が人の心を打つ、ひとりの人の行為が他の人の心を聞いて神に向かわせると見えるが、人は思い上がり、うぬぼれてはいけない。すべてのことは神のなされる業である。

いばらと石地の日本にキリスト教の種が蒔かれ育ってきた。多くの殉教者や辛酸を嘗められた先輩たちの功績をたたえと共、背後にある神の恵みの導きをおぼえ、魂の収穫感謝を心よりささげたい。

## エッセイ

### Kさんの『待つ』心

Kさんから手紙が来た。先日何人かの気のおけない仲間との旅行で撮った写真も送られてきて、それはそれで楽しい思い出をとどめるものとなったのだが、同封されていた短い文章が私の心に残った。

「まつ」と題された千五百字ぐらいのものだった。「まつ」は「待つ」である。

Kさんが待つものは、この文章のなかでは大根の成長であり、たくさん漬けの成果を待つことなのである。彼女は書いています。

「一袋の種子を四畝に蒔き、少し成長した大根の株のなから三分の一くらいを間引いておくが、小さいと思っていた大根もいつか畝いっぱいになり、とり上げを待つ時期となる。十一月中旬、私はもう待ちきれずに大根を抜く。直径六・七センチ、長さ四十センチほどになったものを、最初は三十本くらい抜き取って、後は畑に残しておく、それで、それぞれ葉を少しづつむしりとると、四から五本づつ藁で束ね、そのまま近くの果樹に渡してある竹竿に下げておく。一般には、このとき、川か

水道などで大根に付いた土を洗い流しているようだが、わが家では、味が落ちるとかいつて洗わない。秋の一日をこうして過ごす、後は干し上がり程度を見るのが楽しみになってくる。北風でも吹くと、一気に水分が失われ、大根はしんなりとしてくる。そして五日から一週間も過ぎると、いよいよ漬け込みの時がやってくる。」

Kさんのこの文章を読んでいて、私はうらやましくなってきた。大根の種子を蒔き育て、漬け込みという日本中どこでも行われている平凡な作業の、骨折りの部分が全く感じられず、その成長や漬け込みに到るプロセスに於ける心のはずみが、静かに伝わってくるからである。六十才に近いかもしれないKさんにとっては、決して楽ではないであろう農作業の一つ一つが、むしろ楽しくて仕方ないという感じである。嬉々として畑の中に入りし、一輪車で大根を運ぶモンペ姿のKさんの様子が目に見える。

Kさんは続ける。「・・・そこで、わが家独特の漬け物を作り出す。た

るの底から衣とまぜ物、大根と、順に重ねあげ、ほぼ一杯になると干し葉を乗せ、もう一つ玉石を乗せてできあがる。これが十一月の二十日頃になるので、後はこれから約三週間を「待つ」わけである。」

Kさんが以前言っていた。「若いうちは、子どもを育てるといふ、いわば時間のスケールの長いことに喜びを感じていたけど、子どもが成長してしまつてこちらが年をとつてみると、野菜や花などという、時間のスケールの短い物の成長に関わる喜びがあるということを知ったのよね。大根の話は、このことだったのである。」

「漬け込んだたるの、石がずれていないかを見、四・五日すると水が上がってくるのを見る。このまま三週間放置するわけだが、この間が待ちどろしい。特に二週間を過ぎると胸がおどる。味はどうだろうか。うまくできたらうか。あけてみようか。いやもう少し、もう少しと、毎日この思いが去来する。」

読んでいる私までが、わくわくしてしまふ。

県立高校美術教諭

中島

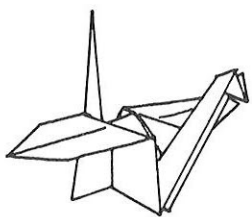
睦雄

そしてKさんは、彼女の幸福論を実例で示してみせる。

「自然を相手に生きたわが家の姑は、終生この『待つ』喜びをかみしめて過ごしたようである。八十三才の最後まで、彼女の心は『待つ』という期待の中にあつた。為すこともなく、ただ老いをうらみ、死を『待つ』だけの灰色の心ではなかったはずである。」

Kさんはこんなにも平凡で地味で、着実に喜びに満ちたお姑さんの生き方を、そっくり受け継いでいたのだつた。

すっかり感動してしまった私は、夢中でKさんに手紙を書いた。ところが、いろいろな思いがこみ上げてきて、私の手紙は全く支離滅裂なものとなっていたのである。



## 地球の裏側で活躍する人たち

学者もどきのつづやき ⑩

山形大学医学部教授  
仙道 富太郎

世話をお願いしてきた。でも、うかつなことに、日系の方々がたった三十年前にこの地にやってきたとは、考えてみたこともなかった。そのことに、まず驚いた。そして、いつの間にか、私はその出版物に釘づけになってしまった。日本政府が示した

バラグアイの首都アスシオンには、日系の人が経営するホテルがあり、長期間滞在するときは、そこに予約してもらおう。日本式の深い風呂桶と和食の朝食が魅力である。今回逗留した部屋のベットの横のスタンドお

きの引き出しに、

ピラボ移住地開拓

三十周年記念誌

と書いた出版物を

見つけた。「オヤッ」

と思った。表や紙

に一九九〇年とあ

る。ということつ

は、ピラボの日本

人移住地は、一九

六〇年に開拓が始

められたことにな

る。バラグアイで

は、ずいぶん日系

の方々にはお世話

になってきた。特

にT君には、何か

ら何まで日常のお

世話をお願いして

きた。でも、うか

つなことに、日系

の方々がたった三

十年前にこの地に

やってきたとは、

考えてみたことも

なかった。そのこ

とに、まず驚いた

。そして、いつの

間にか、私はその

出版物に釘づけに

なってしまった。日

本政府が示した

条件といかに違っていたか、密林のなかに放り出されて途方に暮れた様等々、ある人は激高した筆で、またある人は抑制したトーンで、現在の我々には、想像もつかない苦勞の数々が書き連ねてあった。そして、ことの大変さを、もっとも如実に物語っているのは、三割近い家族が、ピラボの地を後にしていることである。養蚕を勧められてやったところが、日本の農家を圧迫するということが、桑の木を引き抜かれてしまった話などを淡々と書き連ねる老人のことを想うと、涙が出てきてしまった。

一九六〇年といえば、私は学生運動で暴れていた頃である。若い日々の記憶として私の重要な部分を占めており、学生運動をしていた自分を否定しようとは思わない。しかし、日本中が安保条約で騒然としていた頃に、夢と不安を抱えながら、遙か南米の地に旅立っていった人たちがいたことを気づかされてみると、なんと表層ばかり見て生きてきたことかと愕然とする思いである。わが国がその後速いスピードで経済発展を遂げていったその時期に、とても想像できないような辛苦をなめながら、それでも生きていくためには選択など許されなかった人たちのいたことを想うと胸が熱くなってしまう。

それでも何とか乗り切れた人たちはまだいい。巻末のピラボ移住者名簿のなかの「転出、転出先不明」と記された人たちはいったいどうなったのだろうか。移民ではなく棄民だと書いてあるのを見たこともある。NHKが一九六〇年代のブラジル移民の人たちのその後の二〇年を追跡したNHK特集のビデオを見ていたらブラジルは、奴隷制度を廃止して、それに代わる労働力を移民に頼ったとある。こんな事情を当時南米にわたった人たちは、知る由もない。

私の想いはめんめん続く。しかし、何も知らない第三者が、感傷的にまくしたててみても、それは荒波を超えてがんばってきた人たちに對して、実際は失礼なことなのかも知れない。前出のT君に以上のような話をしたら、「そんなたいした苦勞はなかったと親から聞いている」という答えが返ってきたことがある。いや、実にT君はあかるく、たくましいのだ。工学部を卒業した彼はコンピュータにめっぽう強く、アツという間に自分の会社を作ってしまった、二十八才の若さで、従業員十人の会社社長になってしまった。日本とも取引があるらしく、筆者がバラグアイを訪れたとき、ちょうど円が二一三円安くなり、日本への送金



## 朝のソーヤたち

⑦

教会大東団教団キリスト教  
永野三恵

秋。風になびくコスモスのはなが可憐だ。

コスモスの花を毎年部屋に飾りたくて、私は近所に畑を借りていて、いつてもよい。ある年は、小さな緑の芽を抜き取ることができず、畑の一面をコスモスにしてしまった。今年の夏は雨が少なく、咲いてくれるかしらと心配していたが、季節の便りをちゃんと届けてくれた。

ついこの間まで、6人家族を支えるのに大忙しだった我が家も、あつという間に、娘たちはそれぞれの道に進んでいってしまつた。「自分の時間がない。早く子どもたちが離れてくれたら・・・」と思っているうちが華よ。」と先輩諸姉から聞いていたが、いざ、その実感を味わうまでは、私も、少し静かな生活をした

と思っていた。失つてみて気づいたが、3人の娘たちの若い張りのある声の響き、何がそんなに楽しいのだろうと思うほどの屈託のない笑い声や娘たちが何気なく着ているブラウスやセーターの色彩が、生き生きとした空気をかもし出していた。

八十六才の姑は、「おばあちゃん、行ってきます。」とか「ただいま。」と、娘たちから声をかけられるだけで、元気が出るというていた。まだまだその心境にはなれないが、我が家も今までと違う段階に来ているなと実感する。三人の娘たちを育てているときは、夢中で見えなかったものが少しずつ見えたりする。

私たちが育てたというより、やはりたくさんの人たちの愛情と祈りによって支えられ、育てられたとつくづく思う。三人同じように育てたつもりでも、こうも違うものかと思う様相を見せられる。

# プリズム

子どもたちの季節 仙道家

夏休みが終わろうとしていたある日、映画を観に行きました。

それはとても仲の良い夫婦の話ですが、だんだん妻の具合が悪くなり、医者に見てもらおうと「夫との関係に縛られている」といわれ、夫はこれを振返る、というものでした。しかし、現実には自分が妻を縛っているのか、はじめから縛る紐さななかったのか、夫には分からずに途方に暮れる・という展開のあらすじでした。

一カ月あまりの帰宅訓練を経て、九月一日付で白山敬が家庭復帰しました。

帰宅訓練に入る前後、敬の心も体も痩せ、疲れていました。

日に日に疲れを堆積させてゆく敬に、あまりに無力で、格闘するようにして創ってきた関係の余りにも貧しさに呆然としてしまいました。

また、彼の十年にわたる光の子どもの家での生活はどんな内実をもた

らしたのだろうか。喜怒哀楽などの全てがここで展開していただろうに・と考え込んでしまいました。

一カ月余りの祖父宅への帰宅訓練の間に敬は徐々に元気を取り戻していききました。そのための祖父の心遣いが敬との生活づくりのメインテーマになっていたことでした。

敬が祖父の家に帰ってから、心や体の不調を表現してからは、『どこでも、元気でさえてくれればいい』と、そればかりを願っていたいました。

二期に入ってから、自転車をとり敬と家族がやってきました。敬は髪をさっぱりとし、元氣そうな表情でした。新しい学校に通い始めていることを静かにほかの子どもたちと話していました。

いつまでも、明るく元氣な敬でいてくれますように。 池田 祐子



原田家日記

「他の施設へ行きたい」

職員に厳しく叱られた後、加津子が言った。

私たちは、これまで、ここを家庭に限りなく近づけるということをテーマにしてきた。住居、生活、人間関係・。が、それも私の思い上がりであったことが評価として出された思いである。

家庭であれば、「出たい」という思いはあっても、「よその家にお世話になりたい」とは、おそらく思わないであろう。

住むところの選択の自由。複雑な思いはあるが、それは認めなければならないのではないか。

私たちの基本的な姿勢は、「来るものは拒まず、去るものは追わず」ということであると話し合われた。

実際、そうだろうと思う。しかし、私は揺れた。動物だって、巣離れは一人で生きる力をつけて追い出すのだ。今、彼女を出したら、堕ちてい

くのを早めるだけだ。自身では、その判断ができない子どももいるのだ。

そう思う一方、彼女の判断力の有無を誰が判断できるのか。何よりも、私の働きがそんなに彼女の為になっているのか、誰と比べて優れていると思えるのか。傲慢な思いとそれを打ち消す自信の無さが、関わりを揺るがせる。

長期入所の子どもたちが、皆揃って思春期に入り、それぞれ揺れを見せている。

それは、そのまま、関わってきた者の揺れになる。

これまで、犯してきたであろう許されざるあやまち・。しかし、何が間違いだったのだろう。足りないこと、満たされないことが、こまめで大きな心の穴をあけてしまったのだろうか。

私で充分だとか、これから頑張れば間違えないとか、そんなことではないし、ありえない。それでも、これまで関わってきたこの子と共に、と思ってしまう。それは、ただの自己満足なのだろうか。許されないこ

となのだろうか・。迷う十一回目の秋である。 岩崎 まり子



河のほとりで 旗井の家

子どもがしでかしたトラブルで落ちつかなかったある日の午後、陸男が紙切れを一枚差しだし「これ・、落ちちゃったよ。」と言ってきた。何のことかさっぱり分からず「えっ？何これ？」と尋ねると、「就職試験の結果通知」と陸男。「えっ、うっそ、ダメだったの？、どーして!？」と私がひとりで騒いでいると、「それ、よく見なよ。」と陸男。言われてもう一度見直すと「合格」の二文字が輝いていた。陸男にまんまと騙されたのである。どうりで落ちたというには落ちついてはいはずである。

年度当初は、専門学校進学を希望し具体的に学校を探し始めていた陸男だった。が、進学のための準備・つまり勉強の方に今一つ身が入らず、「きちんと勉強できないのであれば、私たちとしては経済的なサポートをしかねる。」という話が菅原先

生からあった。陸男にとっては自分のおかれている境遇をあらためて思い知らされるような厳しい話であつただろう。しかし、過去にとらわれず現実をしっかり見つめ、全力をぶつけて目的に向かって前進して欲しい・という私たちの思いであったことはうまく伝わらなかったようである。

結局、彼は就職を選んだ。めんどうなことを言われるくらいなら進学はやめた・と考えたのか、それとも、一日も早く自立したい・と考え直したのか。本当のところは定かではないが、それでも彼なりに心の葛藤はあり、その結果たどり着いた「就職」だったと思う。

機械関係の仕事に進みたいという彼の希望通り、バイクや自動車で有名な静岡県内の企業に内定が決まった。今、彼自身が選択し、彼自身がつかんだ「人生」の出発点にたち、スターターの撃つピストルの音をじっと待っているときである。

ピストルが鳴ってしまったら、自分の力で走るだけだ。転んでも誰も起こしてはくれない、代わりに走ってくれる人もない!。などなどを残り少なくなった日々にしっかりと伝えたい。そして、いつも応援している者のあることも・。倉沢智子

光の中で

佐藤家

あんなに生き生きとその緑を誇って茂っていた葉たちがそれぞれに色づき風もないのにヒラヒラと散っていくさまは何ともあわれをさそっていています。

子どもたちと暮らし始めて一年半がすぎました。

これまでには思いもつかなかったようなことがぎゅぎゅ詰まったこの日の日々でした。

人の心には、人の力では決して埋め合わせることができないと思われような心の「穴」があります。

子どもと出会い、子どもと関わり、子どもたちのなかに見いだしたその「穴」を、あらん限りの力を総動員して必要と思われることを為し、自分なりの心を込めて「愛」し、埋め合わせようとしても、それは徒勞のように塞がることはありませんでした。

人は誰も孤独な存在なのです。近くに親、兄弟、恋人など誰がいたとしても、私とどこまでも一緒にいてくれることなどないのです。誰でもいつかは死んでゆくのですから。

私が教会学校で教わった聖書の箇所をそんなとき思い出します。

「見よ。私は世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

ここにいる子どもたちは、私などよりずっと幼い時期に、底知れぬ孤独と直面してきたのです。そして今も。その孤独な思いが心の穴のようには私には思えるのです。

私の働きは、その穴を埋め合わせることなのです。しかし、どんなにしても、埋め合わせることができなかった・と思うことばかりが続いています。

そんなときに私は祈ります。

「心をつくして主に信頼せよ。自分の知識にたよってはならない。」

そうです、私は心を込めて子どもに仕え、その上はきつと主が私の働きの足りなさを補って下さるのです。私は子どもにも伝えたい。

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主はそれをなしとげられる。」

心を込めて子どもと関わり、その上は神の力によります。子どもたちの心の空腹が満たされますようにと、心から私は祈ります。 神田 幸枝



現場から

## のびやかに ふくよかに

## Ⅲ

笹山 恵理

いわし雲が夕焼けで赤く染まり、秋の深まりを思ふこの頃です。

皆さまいかがお過ごしでしょうか？

光の子どもの家ではそれぞれの子どもたちが、それぞれに育ちの深まりを見せてくれています。

なかでも小さな子たちは日々違った成長を見せ驚きの連続です。

その小さな子どもについてご報告します。

小さな子どもは裸足が大好きです。

二才の洋、美季、山菜の貴樹の三人の靴が庭に転がっていない日はないくらい、気がつくとも裸足のままあらこちらへ。「靴はいて」と言う返事は必ず「イヤッ」。

何故なんだろう、外では靴をはくものだという概念がまだ育っていないからだろうか。

でもそれだけではなさそう。開放感があるということだけでもないだろうし・・・。

靴を脱いだ子どもにはどんな喜びの世界が広がっているのだろう。

洋は砂場につくと靴を脱ぎたがる。靴を脱いでは砂場を駆けめぐり、寝っ

転がったりする。美季は靴をはいて外へ行き、はいたまま帰ってくることはあまりない。裸足のまま、あるいは靴下のまま庭を歩いている。

感触が楽しいのだろうと思い、靴もはかせずそのままにしていた。

ある日、その思いを強くする出来事があった。それを教えてくれたのは洋だった。

「みてー」の声で洋の方を見ると玉砂利を集め山を作っている。

「お山作ったの？」と聞くと、「うん」。洋は砂利の山をつくっては崩しつくっては崩していた。

次に砂利をつかんだかと思うと、思いきり投げた。投げては「みてー、みてー」と大喜び。そうしているうち、洋は靴を脱いだ。

「みてー」とそこらじゅう走り回る。走りながら「みて、みて」。

走っている洋は極上の笑顔。

ぐるぐると回り続けて突然ぱたと砂利の上に寝転がると、じっとそのまま動かなくなり、少したつと顔を上げニコツと笑う。

それから先はいつくばってみたい「およいでるのー」と手足をバタバタさせてみたり。そしてあいかわらず「みてー、みてー」。

そうやって文字どおり全身で砂利と遊ぶ洋を見て、心が震えた。すごい！子どもってすごいんだ。何て豊かな遊び方だろう！。すごい感性だろう！。

洋は、遊んでいる当人はもつと感動していたのではないだろうか。そのことは彼の行動とともに言葉にあらわした。

「みてー、みてー」は、そのすごさ、おもしろさ、感動を伝えようとしているのではないだろうか。そして感動を伝え、分かってもらうことによって、その感触を自分のものになっているのではないか。

洋の「みてー」に、「石投げてるの？」「およいでるんだ」と、見たままを返事したとき、洋は「うん」と答えるだけだった。

けれども洋は、自分のしていることを見て欲しくてそう言っているというよりも、砂利っておもしろいよ、触ったらこんなふうだったよ、という感動を伝えたがっているのだろうと強く確信した。

返事を「すごいね、気持ちいいね」などに変えてみると、「そうでしょ」

といわんばかりの笑顔を洋が見せてくれたのは、私の見間違いでも自己満足でもないだろう。

ヒトが生まれてくるときは全く自然そのもののなのだろう。

そして、たくさんの人為的な学習を重ねて大人になっていく。すっかり大人になる頃には、最初の自然な存在とは縁もゆかりもないほどの現代人になりきっている。

そんな私たちの内奥に残っている〈子どもごろろ〉に、子どもたちは働きかけ共鳴を誘ってくれる。

何となく旅に出たくなったり、夕焼けを見ては幼い頃を思い出したりする〈子どもごろろ〉は自然へ回帰する心でもあるのだろう。

子ども、特に幼い子どもたちは、私たちの忘れてしまった遥かな自然な存在へのアタッチメントのような働きかけを今日もしてくれている。

子どものしていることには必ず意味があるという。その言葉を知ってはいけれど、この日、洋によってあらためて教えられた。どれほどに靴が邪魔かということも。

そう思って私も裸足になると、砂利は案外心地よかった。少しは裸足の子どもにも寛容になれるだろう。

いつか必ず靴をはかなければいやだ、という日が来るのだから。

## 養護メモ 57

## 家族 その十二 『情緒Ⅱ』

原田家で、中学一年が中間試験のための学習会をしていた。中学三年生の敬にも大事な中間試験なのだがどうにも身が入らず、ダイニングルームでTVを見ていた。

鈴木由紀子が、「敬ちゃん、ごめんね。中一の子たちが中間試験の勉強をしたのでTVはあとにしてくれる。」と言うが、敬は無視。「あなたも勉強しなきゃね。それが終わったら見ればいい。」と鈴木。敬は動かずTVに見入る。しばらくして鈴木と一緒に学習指導をしていた下山英哉が、「由紀子さんの言ったのが聞こえただろう。TVはあとにしよな」と、スイッチを切った。

敬は無言で立ち上がり、足音を荒げ子どもたちをにらみつけダイニングルームのドアのところで立ち止まり、「おもしろくねえな！」と言って、ドアの側面のガラスを足でたたかに蹴った。大きな音を立ててガラスの破片が飛び散り、子どもたちは静まり返っておびえた。

「何やってんだよ！」と下山が叫びそばに行ったが、敬は「うっせえなあ、オレはTVが見たいんだよ！」

と、自分の部屋に入ってしまった。

しばらくして下山が敬の部屋に行くと、石膏ボードできている壁をげんこつで打ったらしく無惨な穴をさらしていた。「どうしてこんなことをするんだよ。」下山は「こんなことをしても何もいいことがないだろう」と続け、自分のしたことの意味を確認して欲しいと迫った。それは、修理を頼むなり、謝罪などしようと考えてのことだった。

敬は「だってTVが見たかったんだもの。いつだってオレが見たいときに見せてくれないんだから・・・。」と、言い続けるだけだった。下山は、「それでガラスを破ったり壁に穴をあけてもいいことになるのか！。ガラスや壁がオマエに何をしたというのだ。」と、迫った。敬は「オレは何も悪くない、TVが見たいのに見せてくれなかったのが悪いんだ。」を何回も繰り返した。下山は少しじれてきて、「それじゃあ、TVを見せなかったからガラスが破れ壁に穴があいたというのか」と気色ばんだ。すると敬は、「そうだよ分かっているじゃ。」と、うす笑いを浮かべた。

下山は、「何だと、そんなバカなことがあるもんか！」と激昂した。そこへ、鈴木が入ってきて、「ごめんなさい、私の言い方が悪かったのかも知れない。後で私がよく言い聞かせますから。」と、場面を引き取った。

その後、鈴木が敬に、反省させ、謝罪を一緒にしようと試みたが、敬はガンとして、「オレは悪くない、TVを見せなかったからガラスを割り壁を破ったんだ。それは当たり前だ。」と繰り返し動かなかった。

一般に、内省する心が弱い、ほとんどない思春期の子どもたちが殖えている。オウム真理教に走った若者たちなどは典型的なそれだと思つた。父親不在で母が父の分まで担っている家がこの国の子どもたちの家庭のほとんどだ。これが問題の根っこなのだと思う。家でどんな激しく悲惨なことが起きても父が家に帰る頃には子どもは眠っているのである。

子どもがワルサをする。母が父にこの子はこんなことをしてかした、叱ってやって下さいと報告する。父は怒り、それでもウチの子か！など

と激しく叱責する。子どもは恐れ、激しく泣く。それでも父はたかぶって叱責を続ける。今度は母が子どもをかわいそうに思い、「もう勘弁して下さい。これから気をつけますから。」と子どもをかばう。

すると、父は「オマエが悪いからだ」と、激しい怒りを母にぶつける。ある時は母が泣いて詫びることもある。そんな母を見て、子どもは母にすまなく思い、すまない原因になった自分が悪かったと、思い当たり、激しく後悔する。そうして内省する心が生成されるのだ。

乳幼児期から学童期までに、孤立無援で非常に緊迫した状況に立ち会った子どもはほとんど内省するなどの心を持ち得ないと、心理学者や精神科医たちは言う。見捨てられ症候群と呼ぶ学者もいる。

孤立無援で叱責され、脅かされたりしている子どもは、自らを防御するのに精一杯の状態だからだと思う。他のことなど思いやれない絶体絶命の状況なのだから。養護施設は絶体絶命を何度めぐり抜けてきた子どもたちの終着の寄る辺なのだ。

1996年度も  
基準外職員確保のため  
バザンを行います。  
不要品などのご協力も  
よろしくお願いします。  
送り先は、光の子どもの家  
バザン実行委員会 まひも



日誌抄

7. 30 ▶ 8. 31

- 7月30日 日本キリスト教団東大宮教会夏期学校に小中学生参加。群馬県赤城山山頂の赤城クリスチャン荘にて8月1日まで。大自然の創造者と出会う2泊3日。
- 3日 中学1・2年生グループが、この夏構内の草取りなどの清掃をしっかりとった褒美の、鎌倉の海へ。鎌倉在住の塩沢和弘氏のお家をお借りして。自炊をしながらの2泊3日。湘南の海を満喫しました。感謝。
- 7日 小学2年生～4年生までの夢の会、ハケ岳登山へ。谷本清光画伯の小海町のアトリエ阿戸倉山荘に宿泊しての2泊3日。谷本画伯の大作が並ぶ豪華な部屋での起居。ハケ岳の主峰横岳へ全員登頂に成功。谷本先生、陶芸家の池端寛先生のご一家や近所の方々にぎやかなバーベキューの交歓会。すてきな思い出を感謝。
- 9日 この日から小学5・6年生の輝きの会が、東京電力株式会社の社内ボランティアグループ『はむこ会』東京支部のご招待で東京都立城島海浜公園に1泊2日のキャンプ。ビッグバードの東京国際空港を見学し、楽しい夕食は『はむこ会』のみなさんとバーベキューで盛り上がりどのテントも夜遅くまで灯が。巨大なジャンボ機がときおり頭をかすめて飛んでゆく東京都内のテント生活は思春期入口のやわらかな感性たちを揺さぶって、驚きに満ちた美しい記憶をしっかりと・・・。
- 10日 森山辰二（5才）、洋（2才）兄弟入所。笹山恵

- 理保母担当。入所前面接をする間もない緊急の入所に、付き添ってきた母も、子どもも泣いて・・・。
- 11日 私たちの心の基底を形づくってきた年中行事の一つのお盆の帰省開始。家庭訪問を重ねて家族間調整しほとんどの子どもたちが帰省できました。
- 12日 湯河原の府川氏宅と養護施設城山学園セミナーハウスをお借りして、お盆帰省できない子どもたちのための海水浴を2泊3日で。府川ご夫妻の細やかなお心遣い、城山学園金子園長先生のおもてなしをお受けして。
- 22日 長いこと熱心にご支援の向後俊彦氏より美味しい梨のプレゼント。今年の初物。ありがとうございます。
- 28日 江森ヘヤーサロンより散髪のボランティア。感謝。
- 30日 麺類業組合青年部（会長柴田朝尾氏）の朝霞、志木、和光、新座など県南4市の有志8名が手打ち天ぷら蕎麦をたくさんプレゼントを。光の子どもの家後援会（会長金子嘉雄氏）の役員方が汗だくで設営の準備。篠崎忠広氏の明快な解説に、さながら舞を見る名人たちの鮮やかな手さばきに見とれ、極上の味わいに小さな子どもたちまで歓声を上げて。江森藤雄町長や栗原関也町議会議長などをはじめ、町の人たちも大勢駆けつけて盛り上がりました。感謝。
- 31日 さよなら夏休み大パーティ。この夏のたくさんの思い出を確認し、2学期を迎え撃つ夕食会を。園庭で。こんな夏休みで一回り大きくなりがんばっています。（智子）

反 射 光

☆三軒の家の花ミズキに赤い実がなると辺りの静けさとは対称的に光の子どもの家は慌ただしくなる。☆初年度から続いている「感謝の集い」を、畳や襖、障子を張り替え、内外壁のペンキ塗装、その日に出す軽食など自分たちで準備する。☆様々な研修も職員の休暇も、夏休みをした本紙の発行も集まり戦場状態が夏休みから半年近く続く。それでも、年に一度の出会いを楽しむ機会を待つ職員たちの表情は明るい。ご支援者や地域の方々にお励ましの方々に精いっぱい感謝を表したいと準備に余念がない。☆年を重ねる毎に厳しくなる子どもたちの状況は悪化の一途だ。沖縄の少女暴行事件は大きな問題となったが、似たようなことで公にならず、取り上げもされない子どもたちの迫害は質量ともに深刻になっている。そんな子どもたちの側に立ち続けることも至難のこととなる。☆自らの退路を断ちながら、子どもたちの側に位置し続け、もう十年を展望したい。（哲）